

広告 企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

伝統を守る職人の…新たなる一歩

小岩井 良馬 長野／上田 織 伝統工芸士



スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。伝説の深夜番組「カノッサの屈辱」でその名を世間に広め、「進め!電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。



1月17日、プレゼンテーションにて

本プロジェクトは2016年、放送作家として「料理の鉄人」などの多くのヒット番組を手がけ、またくまモンの生みの親でもある小山薫堂氏をプロジェクターのスーパーバイザーに迎え、隈研吾氏(建築家/東京大学教授)、生駒芳子氏(ファッション・ジャーナリスト/アート・プロデューサー)、下川一哉氏(意匠研究所)らをサポーターメンバーに発足。昨年度は、52名の匠によるプロダクトが誕生。

若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への採用や、ロックフェラー家主催のチャリティイベントへ出品されるなど注目を集め、匠自身もTVやWebメディアへの掲載など目覚ましい活躍を見せている。

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催:LEXUS)は、日本各地で地域の独自性や伝統技術を生かし、新しいモノづくりの挑む「匠」を応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援



商談ブースでの小岩井さん

「伝統を守りながら新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。地域の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。



バイヤーと商談中

世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきつかけとなる大きなチャンスを手にした。また、商談会の終盤ではヒムスジャパンとのコラボレーション企画「LIFE with NEW TAKUMI」新しい匠、新しい暮らしが発表されるなど、プロジェクトも進化している。



プレゼンテーション

「信州らしさ」を形に

古くから養蚕が盛んだった信州は、絹織物の産地としても知られた。豊富な繭に、山国ならではの多様な草木染の材料。そこから生まれる「信州織」は、国の伝統的工芸品にも指定されている。中でもかつて「蚕都」と呼ばれた上田市の「上田織」は特に名が知られた存在だ。

そのルーツは今から約430年前、戦国武将の真田昌幸(1547~1611年)が上田城を築いたころ始めた「真田織」にあると言われている。「真田の兵のように強い」と全国に伝えられた上田織は、江戸時代には大島紬(鹿児島県)、結城紬(茨城県・栃木県)と並ぶ「日本三大紬」としてブランドを確立した。



りんごの樹皮

小岩井さんは上田織の織元「小岩井織工房」の三代目染織職人。手掛けるのは主に着物や帯など和装に

願いを込めたリンゴの実

試作段階では、さまざまなものにチャレンジした小岩井さんだが、自分のイメージと実際にできたものがなかなか一致しなかった。当初のテーマに据えた「地域性」が出ているか、職人の仕事として納得できる出来栄か、多くの人に手に取ってもらえるのか。「生みの苦しみ」は想像に違わず、大きかった。

それを乗り越えるきつかけは、何か一点に絞ってみてはどうか?という、小山氏からのアドバイスだった。自分の思いを突き詰めた先にあったのは、原点。形にすべきものは、リンゴの樹が育むもの「リンゴの実」だ。

形や丸み、色合い、金具の色や大きさ。全てにこだわって「リンゴ染めのチャーム」が完



エリア・コンサルティング

帯など和装に関する製品で、伝統的な色や柄はもちろぬ、着物を着る機会が少ない現代の若者にも上田織に興味を持ってもらおうと、現代的なテイストを取り入れた新作にも積極的に取り組んでいる。

上田市街地の西、旧北国街道に面した工房は、手織りのやさしい風合いにこだわる。そこでものづくりにあたる小岩井さんが近年強く意識しているのは「信州」である。上田という場所だからこそ生まれるものであること。大学卒業後、欧州で暮らした経験から、現地の人々が自国や自分自身のアイデンティティをとても大切にしていた姿に刺激されたためだ。

自分が追い求めてきたものを形にする絶好の機会。今回「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」



完成プロダクト「りんご染めのチャーム」



小岩井 良馬
長野／上田 織 伝統工芸士

長野県上田市生まれ。和光大学経済学部経済学科卒業後、その後ドイツへ渡り飲食業に3年従事したのち上田織の仕事に就く。2017年に伝統工芸士の認定を受ける。2012年全国伝統工芸品展入選。



織機と小岩井さん

のづくりに対する自身の考え方が変わりつつある。「伝統的な技法の枠組みにとられず、新しい素材との組み合わせや、芸術性のある作品にもチャレンジして、上田織をアピールするチャンスを広げた

「伝統的な技法の枠組みにとられず、新しい素材との組み合わせや、芸術性のある作品にもチャレンジして、上田織をアピールするチャンスを広げた

への参加を、小岩井さんはそうとらえた。良き伝統は損なわず、信州らしさを感じられる、一歩突き出した素材。そこです求めたのは染料だ。信州の特産品であるリンゴの樹皮を煮出して染め上げた上田織は、独特のやわらかい風合いになる。そのリンゴは「シナノゴールド」「シナノスイート」「秋映」という長野県オリジナル品種を使う。複数の品

種で染め分けることで、色のバリエーションが豊かになる。こうして、ベースとなる素材は決まった。これをもとに、多くの人に上田織を知ってもらえるものを作るには、和装関連の製品ではなく、ふだんの生活で身近にあり、手に取りやすいものである必要がある。小岩井さんの試行錯誤が始まった。

LEXUS
NEW
TAKUMI
PROJECT